

## 看護基礎教育における「ベッドメイキング」の授業の実態調査

小坂 信子<sup>1)</sup> 佐々木理恵子<sup>2)</sup> 酒井 志保<sup>3)</sup>

### Field Survey on Lessons for “Bed Making” in Nursing Basic Education

Nobuko KOSAKA Rieko SASAKI Shiho SAKAI

#### 要約

本研究の目的は、全国の看護教育機関での、看護基礎教育における『ベッドメイキング』の授業状況と教育機関の特徴を把握することである。全国看護系学校で授業担当している教員403人から得られた結果は以下の通りであった。

1. 講義時間数は0～1800分と幅があり、養成所が有意に長かった。(p<.05) 演習時間も0～1440分と幅があった。
2. 指導案を「他教員意見」を取り入れ作成している短大が多かった。(p<.05) また、養成所は「教材」から作成する傾向があり (p<.01)、他機関と有意に差があった。(p<.05)
3. 演習で教員1人あたりが担当する学生数は、平均15.9人であった。
4. 教材：①上掛けは上シーツ・毛布・スプレッドの組み合わせで使用している割合が大学・短大・養成所の全体で75.4%と最も多かった。②大学は既成の横シーツを使用している割合が高く、使用するリネン類が多くの教科書と異なっていた。③養成所は、ゴム製防水シーツを使用している割合が高かった。
5. いずれの教育機関でも『ベッドメイキング』の授業では、理論に基づいた看護技術の習得方法、ボディメカニクス、熟練するための練習の必要性などの内容を含めており、看護技術教育の導入として位置づけていた。

キーワード：看護基礎教育、看護技術教育、ベッドメイキング、

The summary : The purpose of this research is to grasp the characteristic of a class state and the educational institution of “Bed Making” in the case of nursing basic education in national nursing educational tions. The results which were achived gotten from 403 teachers who took charge of the class at the national nursing system school were as follows.

1. The lecture hours were 0~1800 minutes. Nursing schools also had significantly longer hours of training exercise than colleges and junior colleges. The hours of training exercise were 0~1440minutes.
2. There were many junior colleges which created “the other teacher opinion” in the introduction in the guide plan. Nursing schools created “the teaching materials”
3. The average number of students per teacher was 15.9.
4. Course material: ① 75.4% of the organizations of nursing education in Japan teach the traditional bed making method that combines a bed spread, blanket and top sheet. ② Colleges had a significantly higher ratio of using ready-made care sheets. ③ Nursing schools had a higher ratio using rubber waterproof sheets.
5. In lessons for “Bed Making”, the contents of “Learning Method of Nursing Technique based on Theory”, “Body Mechanics” and “Necessity of Practice for Proficiency” are added and regarded as introductions to nursing technique education.

Key word : Nursing Basic Education, Nursing technique education, Bed Making

看護学科 1) 助教授 2) 教授 3) 講師

本研究は、平成16年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成によるものである。

## I. はじめに

『ベッドメイキング』は、2002年<sup>1)</sup>の「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」の報告書で、「看護基本技術」の学習項目「a. 環境調整技術」に記されている。そして、基本的法則や方法を正確に知っていることは当然であり、看護教育機関の卒業までに確実に身につけておくべきものであると位置づけられている。

『ベッドメイキング』に関する研究をみると、朝比奈<sup>2)</sup>は臨床では寝具・リネン類が多様化していると報告している。しかし、教育現場では、村上<sup>3)</sup>や東海四県を対象にした三輪木<sup>4)</sup>らが、『ベッドメイキング』の授業は教科書に掲載された内容に忠実な方法で教授している機関が多いと報告している。これらの報告から臨床と教育では使用物品の乖離が起こっていると予測されるが、それをどのように教員が認識し教授しているかは明らかでない。

現行カリキュラム (1997) において、看護技術教育は、各教育機関の教育理念や看護教育における看護技術教育の位置づけ、担当教員の考え方により様々な教育が行なわれている<sup>5)</sup>。『ベッドメイキング』の授業でも教育機関の独自性があるのだろうか。しかし、現行カリキュラムにおける『ベッドメイキング』の授業状況に関する全国的な調査報告は見あたらない。そこで『ベッドメイキング』の教授上の基礎資料にしたいと考え、全国の看護教育機関の実態調査を行なった。

本研究では、看護基礎教育における『ベッドメイキング』について大学・短期大学 (以下短大と略) ・看護師養成所 (以下養成所と略) の機関別の授業状況の把握と課題について検討する。

## II. 研究方法

1. 調査対象：インターネット検索を行い、平成17年度に開講する看護系学校を含めた全国の看護系学校629校に勤務し『ベッドメイキング』を教授している教員。大学128人、短期大学 (3年課程) 26人、看護師養成所 (3年課程) 475人に調査を依頼した。
2. 調査期間：2005.5.10～2005.5.27
3. 調査方法：郵送法による留め置き法。質問紙の作成にあたっては教科書<sup>6) 7) 8) 9)</sup>の『ベッドメイキング』の記載を参考にした。看護基礎教育に携わる看護教員5名にプレテストを実施し、再度研究者間で修正した自作の質

問紙を使用した。

4. 倫理的配慮：『ベッドメイキング』授業担当者宛に調査用紙送付時、研究の主旨と方法を記し、調査への協力は自由であり個人や所属教育機関が特定されないことを文書で説明した。個別封筒による自主投函で回答を求め、返信をもって同意と判断した。
5. 調査内容：
  - 1) 対象者の背景：①所属する看護教育機関 ②性別③年代④看護教育経験年数⑤臨床経験年数
  - 2) ベッドメイキングの授業状況：(1) 授業時期と科目・単元名 (2) 講義・演習時間数 (3) 教員数と学生数の割合
  - 3) 指導目標と学習目標：①指導案作成に影響：イ. 他教員意見、ロ. 教材、ハ. 自分の基礎教育、から単一回答。②指導目標：イ. 技術の興味関心を高める、ロ. 練習の必要性を実感させる、ハ. 今後の動機づけ、ニ. ボディメカニクス/効率性、ホ. その他、から複数回答。③学習目標：イ. 目的・意義の理解、ロ. 対象への配慮、ハ. 手順の根拠の理解、ニ. 手技の習得、ホ. 他職種の監督指導、ヘ. その他、について選択式の順位回答。
  - 4) 授業方法：(1) 教授方法 (複数回答)：①講義②ビデオ学習③学内演習④課題学習⑤自己学習⑥技術の到達度のチェック。(2) 教材：ベッドメイキングの具体的方法と使用リネン類。(3) 臨床で用いるリネン類の教授 (単一回答)：イ. 臨床の主なものすべて教える、ロ. 場で異なることが多いと説明、ハ. 留意点のみ、ニ. 授業で教えない、ホ. その他。
  - 5) 今後の授業に対する考え (単一回答) イ. 時間数：現状のまま、増やしたい、減らしたい、その他。ロ. 内容：現状のまま、深めたい、簡略化したい、その他。ハ. 知識と技術習得の割合：知識を深める、技術を充実させる、両方を充実させる。
6. 集計・分析方法  
結果はSPSS (11.0J) を用い、各項目を単純集計した。指導目標は順位1～順位6まで、それぞれ6点から1点と点数化し項目ごとに平均点を算出した。また、教育機関間の比較は $\chi^2$ 検定を行った。

III. 結果

1. 対象者の背景 (表1, 図1-1, 図1-2)

1) 回収率：アンケート配布629部のうち406部回収 (回収率64.5%) であり、全国の機関別数に対する回収率は大学50.0%、短大61.5%、養成所68.0%であった。そのうち所属教育機関を記入してある403部を対象とした (回答率99.3%)。その内訳は、大学64部 (15.9%) 短大16部 (4.0%) 養成所323部 (80.1%)。

2) 性別：男性7名 (1.7%) 女性396名 (98.3%)。

3) 年代は、全体では30~40代が85%を占めた。

機関別にみると、大学・短大では40~50

歳代が80%、養成所は他に比べ30歳代の割合が43%と多かった。

4) 看護教育経験年数：全体では6~10年が34.0%を占め最も多かった。機関別にみると、6~15年の経験は大学70%、短大56%、養成所52%であり、0~5年では大学10.9%、短大12.9%、養成所36.5%であった。

5) 臨床経験年数は全体では6~10年が43%を占め最も多かった。機関別では10年以上経験のある者は大学70%、短大50%、養成所88%であった。大学・短大が看護教育経験年数が長く、養成所は臨床経験年数が長い傾向にあった。

表1：対象者の所属する教育機関と性別・年代

教育機関	性別			年代					計	
	男性	女性	計	20代	30代	40代	50代~	記入なし		
大学	人数(名)	2	62	64	0	12	32	20	0	64
(n=64)	%	3.1	96.9	100	0.0	18.8	50.0	31.3	0.0	100
短期大学	名	0	16	16	0	1	12	3	0	16
(n=16)	%	0	100.0	100	0.0	6.3	75.0	18.8	0.0	100
養成所	名	5	318	323	3	138	147	32	3	323
(n=323)	%	1.5	98.5	100	0.9	42.7	45.5	9.9	0.9	100
合計	名	7	396	403	3	151	191	55	3	403
N=403	%	1.7	98.3	100	0.7	37.5	47.4	13.6	0.7	100

図1-1：対象者の看護教育経験年数

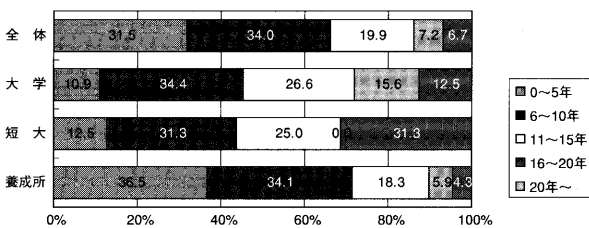
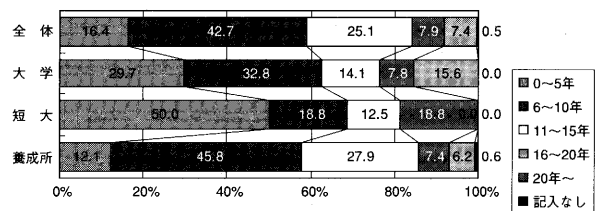


図1-2：対象者の臨床経験年数



2. 『ベッドメイキング』の授業状況

1) 教授時期と科目・単元名：1年次の教授が96.8%と大半を占め、5~6月に教授すると回答した者は85.2%を占め入学早期に教授していた。2年次に教授すると回答した者は3.2%あり、全て大学であり4~5月で専門科目の教授開始時期としていた。

『ベッドメイキング』の教授上の位置づけは、99.3%が基礎看護学であった。

また、その具体的な科目名の記述は147件あり、「基礎看護技術」「基礎看護方法論」「基礎看護援助論」「援助技術論」など様々であった。単元名の記述は105件あり、「環境」が44.7%でその他は「環境」に類似した内容であった。各学科目名や単元名は、教育内容により表示が異なっていた。

2) 講義・演習時間数 (表2)：講義時間数は0~1800分と幅があり、養成所が有

意に長かった。(χ<sup>2</sup>=124.269, df=98, p<.05)。演習時間も同様に0~1440分と幅があった。

全体的に講義90分、演習180分という傾向がみられた。一方、講義時間を設けていないと回答した教育機関が5校(短大1, 養成所4)あり、その機関の演習時間は

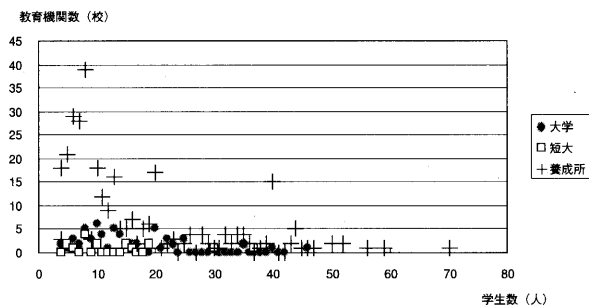
100~270分でデモンストレーションを通して教授していた。また、『ベッドメイキング』単独の時間は短時間とし、他の援助項目と組み合わせて教授し、実習の場面で活用しやすいようにする等の工夫していると回答していた。

表2：ベッドメイキングの講義時間数及び演習時間数(校・%)

時間	講義時間数				演習時間数			
	大学	短大	養成所	計	大学	短大	養成所	計
0	3 (4.7)	1 (6.3)	5 (1.5)	9 (2.2)	3 (4.7)	0 (0)	3 (0.9)	6 (1.5)
1~90	38 (59.4)	8 (50.0)	90 (27.9)	13 (33.7)	17 (26.6)	4 (25.0)	32 (9.9)	53 (13.2)
91~180	15 (23.4)	3 (18.8)	57 (17.6)	75 (18.6)	31 (48.4)	5 (31.3)	108 (33.4)	144 (35.7)
181~270	5 (7.8)	2 (12.5)	56 (17.3)	63 (15.6)	6 (9.4)	2 (12.5)	60 (18.6)	68 (16.9)
271~360	1 (1.6)	1 (6.3)	39 (12.1)	41 (10.2)	2 (3.1)	4 (25.0)	50 (15.5)	56 (13.9)
361~450	0 (0)	0 (0)	27 (8.4)	27 (6.7)	2 (3.1)	1 (6.3)	20 (6.2)	23 (5.7)
451~540	0 (0)	0 (0)	19 (5.9)	19 (4.7)	1 (1.6)	0 (0)	19 (5.9)	20 (5.0)
541~630	0 (0)	1 (6.3)	10 (3.1)	11 (2.7)	0 (0)	0 (0)	6 (1.9)	6 (1.5)
631~720	0 (0)	0 (0)	4 (1.2)	4 (1.0)	0 (0)	0 (0)	7 (2.2)	7 (1.7)
721~810	0 (0)	0 (0)	1 (0.3)	1 (0.2)	0 (0)	0 (0)	3 (0.9)	3 (0.7)
811~900	0 (0)	0 (0)	2 (0.6)	2 (0.5)	0 (0)	0 (0)	2 (0.6)	2 (0.5)
901~990	0 (0)	0 (0)	2 (0.6)	2 (0.5)	0 (0)	0 (0)	1 (0.3)	1 (0.2)
991~1080	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.3)	1 (0.2)
1081~117	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
1171~1260	0 (0)	0 (0)	2 (0.6)	2 (0.5)	0 (0)	0 (0)	2 (0.6)	2 (0.5)
1260~1350	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.3)	1 (0.2)
1351~1440	1 (1.6)	0 (0)	0 (0)	1 (0.2)	1 (1.6)	0 (0)	0 (0)	1 (0.2)
1441~1530	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
1531~1620	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
1621~1710	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
1711~1800	0 (0)	0 (0)	1 (0.3)	1 (0.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
記入なし	1 (1.6)	0 (0)	8 (2.5)	9 (2.2)	1 (1.6)	0 (0)	8 (2.5)	9 (2.2)
計	64 (100)	16 (100)	323 (100)	403 (100)	64 (100)	16 (100)	323 (100)	403 (100)

3) 教員数と学生数の割合(図2)：教員1人あたりが担当する学生数は3.9~70人と幅があり、全体平均は15.9人であった。学生50人以上を1人の教員が担当している機関では、ビデオ学習や自己学習を行なわせていた。

図2：教員1人あたりの学生数



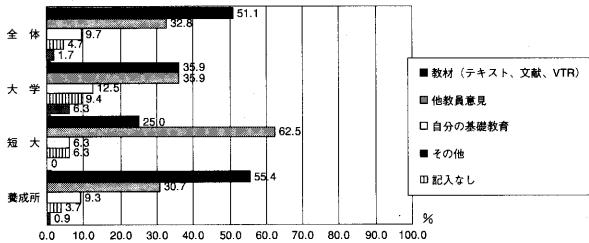
3. 『ベッドメイキング』の指導・学習目標  
1) 指導案作成に影響(図3)

『ベッドメイキング』の指導案の作成上、強く影響を受けたものは全体で「教材(テキスト、文献、VTR)」が51%と過半数を占め、ついで「他教員意見」で周囲の教員の検討が33.3%、「自分の基礎教育」9.7%であった。機関別に見ると、大学は「他教員意見」と「教材」が35.9%と同数であり、短大は「他教員意見」62.5%と過半数を占めた。

項目別では、短大は「他教員意見」が有意に多く(χ<sup>2</sup>=7.690, df=2, p<.05)、養成所は「教材」が有意に多かった(χ<sup>2</sup>=12.847, df=2, p<.01)。

機関別に比較すると、養成所は大学・短大より「教材」の影響を受けていた。(p<.05)

図3：指導案作成に影響を受けたもの

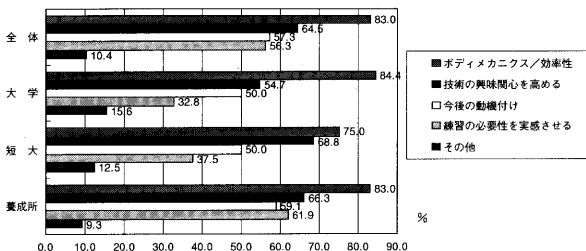


2) 『ベッドメイキング』の単元の指導目標 (図4)

全体では、「ボディメカニクス/効率性」を習得させたいと述べた者は83%と最も多く、ついで「技術の興味関心高める」が64.5%、日常生活経験の不足のため「練習の必要性を実感させる」が56.3%、技能習得の「今後の動機づけ」が57.3%であった。

機関別に比較すると、大学・短大・養成所とも「ボディメカニクス/効率性」は75%以上を占めた。短大・大学が「練習の必要性を実感させる」が30%台であるのに対し、養成所は61.9%を占めた。『ベッドメイキング』の授業にボディメカニクス、看護技術の習得方法、熟練するための練習の必要性など複数の学習要素を含めている者がほとんどであった。

図4：演習における指導目標 (複数回答)



3) 『ベッドメイキング』の学習目標 (図5)

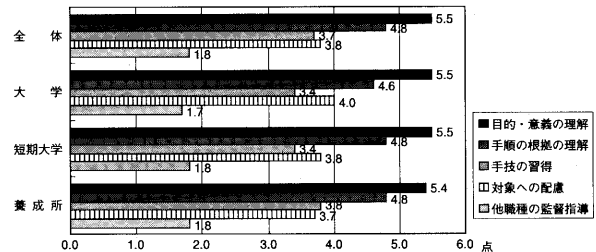
『ベッドメイキング』終了時の学習目標の内容について、選択式の順位回答法により回答を求めた。順位1～順位6まで、それぞれ6点から1点と点数化し項目ごとの平均点を算出した。得点の高い順にあげる

と、全体では「目的・意義の理解」5.5点、「手順の根拠の理解」が4.8点、ついで「対象の配慮」3.8点、「手技の習得」3.7点の順であった。

機関別に比較すると、「対象への配慮」において、大学4.0点、短大3.8点、養成所3.7点であり、「手技の習得」において、大学3.4点、短大3.4点、養成所3.8点であった。

「目的・意義の理解」および「手順の根拠の理解」は各教育機関が学習目標としてあげており、大学では対象の個性にあわせてベッドメイキングができることをめざし、養成所では手技の習熟を目指している傾向があったといえる。

図5：演習時の学習目標を点数化した結果 (複数回答)



4. 教授方法 (複数回答) (図6-1, 図6-2)

1) 方法：全体では学内演習97.5%、講義94.3%で、ついで到達度のチェック77.7%、自己学習69.7%、ビデオ視聴64.3%であった。学内演習はグループ演習が約71.8%と高く、個人演習34.5%を大きく上回った。また、講義・ビデオ学習・学内演習・個人学習・到達度のチェック等の全ての方法を22.1%が展開していた。

機関別に比較すると、大学は自己学習が84.4%と多く、短大の68.8%および養成所の81.4%が到達度のチェックを行っていた。

図6-1：具体的な教授方法の種類

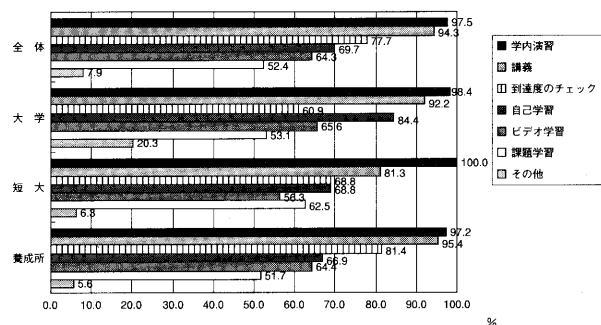
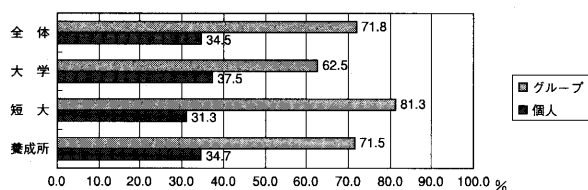


図6-2：学内演習の方法（グループ・個人別）



2) 教材：演習で使用しているリネン類（複数回答）（表3-1, 表3-2, 表3-3, 図7）

下シーツはフラットシーツを全体では99%使用していた。上掛けは、上シーツ・毛布・スプレッドを組み合わせた使用が全体では75.4%、養成所で76.8%で多く、短大で56.3%であった。その一方、上シーツ・毛布・スプレッドを全く使用しない機関が8.6%あった。防水シーツは、全体では92.3%が使用し、その素材の内訳はゴム製のみ44.4%、不織布のみ9.9%、両方使用38.0%であった。ゴム製防水シーツの使用

表3-1：使用しているリネンの種類 (%)

		全体	大学	短大	養成所
下シーツ	フラットシーツ	99.0	100.0	100.0	98.8
	ボックスシーツ	0.2	0.0	0.0	0.3
	その他	1.5	1.6	0.0	1.5
上掛け	上シーツ	84.4	85.9	75.0	84.5
	スプレッド	84.4	82.8	81.3	84.8
	包布	21.6	14.1	12.5	23.5
	毛布	83.4	82.8	62.5	84.5
	綿毛布	20.8	26.6	18.8	19.8
	その他	4.7	1.6	6.3	5.3

表3-2：防水シーツ・横シーツの使用の有無とその種類 (%)

		全体	大学	短大	養成所
防水シーツ	ゴム製使用	44.4	18.8	11.0	51.1
	不織布使用	9.9	14.1	2.5	8.4
	両方使用	38.0	56.3	9.4	33.4
	両方使用なし	6.9	9.4	1.7	6.5
	記入なし	0.7	1.6	0.2	0.6
	計	100.0	100.0	24.8	100.0
横シーツ	平から横シーツ	70.5	51.6	70.5	74.6
	既成の横シーツ	17.1	28.1	17.1	15.5
	両方使用	7.9	15.6	7.9	6.2
	両方使用しない	3.7	3.1	3.7	3.1
	記入なし	0.7	1.6	0.7	0.6
	計	100.0	100.0	100	100.0

割合は教育機関で有意差があり ( $\chi^2=26.181, df=4, p<.01$ )、養成所が多く大学および短大は少なかった。同様に不織布の使用についても有意差があり ( $\chi^2=17.598, df=4, p<.01$ )、養成所が少なかった。

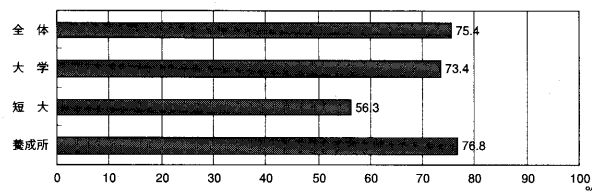
横シーツは全体で95.5%使用し、「フラットシーツから横シーツを作る」が70.5%と大半を占めていた。機関別に比較すると「既成の横シーツ」の使用は大学が多く、短大と養成所が少なかった。 ( $\chi^2=15.344, df=4, p<.01$ )

全体的に、上シーツ・毛布・スプレッドや防水シーツ・横シーツを使用した伝統的な『ベッドメイキング』を教授していた。しかし、短大では上シーツ・毛布・スプレッドを組み合わせた使用の割合が大学・短大より低く、その他既成の横シーツの使用、不織布の防水シーツの使用など臨床で使用されているリネン類を取り入れていた。

表3-3：角の作成法 (%)

		全体	大学	短大	養成所
頭部の角	頭部 (三角の角)	98.0	95.3	100.0	98.5
	頭部 (その他)	0.5	3.1	0.0	0.0
足部の角	足元横側四角	34.7	42.2	37.5	33.1
	足元横側三角	66.3	60.9	68.8	67.2
	足元側封筒織	4.0	4.7	0.0	4.0
	角なし	1.2	4.7	0.0	0.6
	その他	1.0	1.6	0.0	0.9

図7：上掛けにスプレッド+毛布+上シーツの組み合わせで使用している機関数



3) 臨床で用いられている多様なリネン類の教授 (表4)

全体では、臨床の「場で異なること多いと説明」の程度でよいが60.5%と多かった。「臨床の主なものすべて教える」必要があるが7.4%あった。

表4：臨床で使用されている多様なリネンの教授について (%)

	全体	大学	短大	養成所
説明程度	60.5	51.6	43.8	63.2
教えない	19.9	34.4	31.3	16.4
全て教える	7.4	6.3	0.0	8.0
臨地実習で教える	6.5	3.1	6.3	7.1
その他	5.0	4.7	12.5	4.6
記入なし	0.7	0.0	6.3	0.6

## 5. 今後の授業に対する考え (表5)

『ベッドメイキング』の授業時間数や授業内容を今後どうしていきたいかは、全体で授業時間数は、「現状のまま」でよい、または「増やしたい」と回答した者は90%を占めた。授業内容は「現状のまま」でよい、または「深めたい」とした者は78%であった。知識と技術習得の教授内容の割合については「両方を充実させる」が53.8%であった。

一方、授業内容を「簡略化したい」13.4%、授業時間数を「減らしたい」4%で、削除・簡略化したいとする者もあった。それらの機関は講義時間平均245.6分、演習時間平均331.8分で、全体より演習時間が長い傾向にあった。

表5：今後の授業における時間数・内容・知識と技術の比重 (%)

	全体	大学	短大	養成所	
時間数	現状のまま	73.7	85.9	68.8	71.5
	増やしたい	17.6	6.3	12.5	20.1
	減らしたい	4.0	3.1	12.5	3.7
	その他	1.7	0.0	0.0	2.2
	記入なし	3.0	4.7	6.3	2.5
授業内容	現状のまま	47.9	70.3	31.3	44.3
	深めたい	30.3	9.4	31.3	34.4
	簡略化	13.4	15.6	25.0	12.4
	その他	3.5	1.6	6.3	3.7
	記入なし	5.0	3.1	6.3	5.3
知識と技術の比重	知識を深める	12.7	15.6	12.5	12.1
	技術を充実	21.3	17.2	0.0	23.2
	両方充実	53.8	51.6	56.3	54.2
	その他	0.5	1.6	0.0	0.3
記入なし	11.7	14.1	31.3	10.2	

## IV. 考察

## 1. 『ベッドメイキング』の授業状況

講義・演習時間について、石黒ら<sup>10)</sup>が現行カリキュラム以前に調査した結果と比較すると、養成所が長い傾向は同様であった。また教授方法は、講義・視聴覚学習・演習・到達度のチェックなどで行っており、各教育機関とも「ベッドメイキング」の授業を重要視していた。指導目標において、機関別では養成所が日常生活体験の不足のため「練習の必要性を実感させる」が多く、技術習得を目指していた。一方、大学では「対象への配慮」が多く、対象にあわせて知識を技術として行為化する力を身につけさせようとしていることがうかがえた。養成所が実践家としての訓練的な教育課程であるのに比べ、大学は統合カリキュラムであり学問的な発展を指向した教育課程であること<sup>11)</sup>からくる違いといえる。

看護技術教育は、技能教育と技術学教育の両側面からバランスよく教育し、学生のわかる力と行動し習熟する力を育てていくことが重要であるとされ、看護技術を習得する上で、学内演習では学生数と教員の割合は重要である<sup>12)</sup>。学生数と教員の割合は、今回の調査では1教員あたり平均15.9人であった。1ベッドあたり4人の学生が使用した場合を想定すると4ベッド担当となる。その指導体制で十分か否かは今後検討する必要がある。

## 2. 『ベッドメイキング』の授業の位置づけ

入学して早期に学ぶ『ベッドメイキング』の授業に、「目的や意義」、「手順の根拠の理解」を各教育機関が学習目標にあげ、技術をただ単に手順通りに行なうのではなく、知識と技術を関連させ行動の根拠となる知識に基づいた『ベッドメイキング』を教授していると答えていた。また、授業の指導目標として、各教育機関が「ボディメカニクス/効率性」を含めて指導していた。機関別の特徴として養成所では、日常生活体験の不足のため「練習の必要性を実感させる」が多かった。学生の生活の変化に伴い技術の習得が困難になってきたことが指摘されており<sup>16)</sup>、日常生活技術の難しさを実感させ、看護技術を習得するための取り組む姿勢について考える機会としている<sup>17)</sup>。養成所の場合、臨床に密着した実践家を養成するものであるため<sup>18)</sup>、習熟のた

めの学習方法を学ばせる授業として位置づけているといえる。

阿曾<sup>13)</sup>は、『ベッドメイキング』の授業では、看護学生にとって多くの学習要素が含まれ総合的な学習ができるとしている。その中で特に「ボディメカニクス」は『ベッドメイキング』の看護技術習得試験の評価項目にも含まれていることが多い<sup>14)</sup>。また、持永<sup>15)</sup>もベッドメイキング技術と身体の動きと手足の協調運動について知った上で指導していく必要性を述べており、今回の調査結果と一致していた。

就床者がいない状況で行なう『ベッドメイキング』の授業は、学生が入学後初めて学ぶ看護技術である。学生に自己の動きを意識させながら、看護者としての安全で安楽な効率的な動き方を体験し、全ての援助に関わる基本動作を含めて教授することが必要である。また、看護技術教育および理論に基づいた看護実践とするための学習方法の導入として重要な位置づけを持つと考える。

### 3. 今後の課題：教材の選択と教育内容の精選

高橋<sup>19)</sup>は神奈川県下の調査報告で、『ベッドメイキング』の授業で使用するリネンや教授方法を変更している教育機関があることを報告している。今回の調査で、短大は、スプレッド・毛布・上シーツを組み合わせた方法で行なっている割合が低く、大学は既成の横シーツを使用している割合が高く、使用するリネン類が教科書と異なっていた。

伝統的なベッドメイキングを行なっている病院は少ない<sup>20)</sup>。臨床はクローズドベッドにこだわっているのではなく、臨床と教育現場が異なる点は掛け寝具である<sup>21)</sup>と報告されている。

これらの報告と今回の指導目標や学習目標の調査結果から、目的や意義、手順の背景にある根拠等の基礎的知識を教授した上で、具体的方法は簡略化し、臨床で実際に使用している包布や綿毛布で教授する。また、上シーツ・毛布・スプレッドを組み合わせた方法は、ビデオ学習等で紹介するレベルでよいと考える。

教育現場と臨床の乖離について、担当者がどのように考えているかを今後検討していきたい。

## V. 結論

全国看護系学校で授業担当している教員403人から得られた結果は以下の通りであった。

1. 講義時間数は0～1800分と幅があり、養成所が有意に長かった。(p<.05) 演習時間も0～1440分と幅があった。
2. 指導案を「他教員意見」を取り入れ作成している短大が多かった。(p<.05) また、養成所は「教材」から作成する傾向があり(p<.01)、他機関と有意に差があった。(p<.05)
3. 演習で教員1人あたりが担当する学生数は、平均15.9人であった。
4. 教材：①上掛けは上シーツ・毛布・スプレッドの組み合わせで使用している割合が大学・短大・養成所の全体で75.4%と最も多かった。②大学は既成の横シーツを使用している割合が高く、使用するリネン類が多くの教科書と異なっていた。③養成所は、ゴム製防水シーツを使用している割合が高かった。
5. いずれの教育機関でも『ベッドメイキング』の授業では、理論に基づいた看護技術の習得方法、ボディメカニクス、熟練するための練習の必要性などの内容を含めており、看護技術教育の導入として位置づけていた。

## 謝辞

各教育機関で『ベッドメイキング』の授業を担当している教員の皆様に、アンケートにご協力頂き感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 文部科学省：看護学教育のあり方に関する検討会報告；大学における看護実践能力の育成の充実に向けて，p19，2002.
- 2) 朝比奈佳代他：臨床におけるベッドメイキングの現状と問題点，臨床看護，22(2)，p268-275，1996.
- 3) 村上みち子，山口瑞穂子他：基礎看護技術の教育内容の検討(2)－教材としての看護用具に焦点をあてて－，順天堂医療短期大学紀要，12巻，p101-107，2001.
- 4) 三輪木君子他：ベッドメイキングの現状，看護科学学会誌，p250，2001.
- 5) 「看護教育」編集室編：看護教育新カリキュラム展開ガイドブック③保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則等の改正，p1～29，医学書院，1996.



- 6) 深井喜代子：新体系看護学第18巻基礎看護学③基礎看護技術，メヂカルフレンド社，2003.
- 7) 氏家幸子、阿曾洋子：基礎看護技術 I 第 5 版，医学書院，2003.
- 8) 杉野佳江：標準看護学講座13巻基礎看護学 2，金原出版株式会社，2001.
- 9) 小玉香津子他：看護必携シリーズ，看護の基礎技術 I，学習研究社，1995
- 10) 石黒順子・川人しのぶ・倉林美由紀他；看護婦 3 年課程における基礎看護技術教育の実態，看護教育，38(11)，p953-960，1998.
- 11) 宮島朝子：教育課程別看護教育カリキュラムの作成と運営，看護教育講座 2 看護教育カリキュラム，医学書院，2000.
- 12) 前掲書 1)，p82.
- 13) 阿曾洋子：看護技術教育と臨床実習の変化、36(1)，看護教育，p666-667，1995.
- 14) 岩脇陽子、藤田育子；ベッドメイキングの看護技術習得に関する検討、京都府立医科大学医療技術短期大学部，4(2)，p53-58，1995.
- 15) 持永静代：学生の特徴と病床作りの指導、看護教育、27(11)，p692-697，1986.
- 16) 田島桂子：基礎看護技術の教育の見直しとこれからの方向，看護教育，25(8)，p475-484，1984.
- 17) 橋本茂子：ベッドメイキング技術指導についての一考察，東京厚生年金看護専門学校紀要，1 巻 1 号，p8-10，1999.
- 18) 森山美智子、田村やよい：厚生労働省の考えるこれからの看護技術教育現状の分析から，インターナショナルナーシングレビュー，VOL.25，No 2，p59，2002.
- 19) 高橋祐子他：ベッドメイキングの教授内容に関する調査報告，神奈川県立平塚看護専門学校 紀要 10号，p7-10，2004.
- 20) 前掲書 2)，p269.
- 21) 前掲書 4)，p250.